

Contents 〈ブリッジ vol.60 目次〉

- 【連携医の声】 おくぞの耳鼻科クリニック 奥園美子 院長 … 1
- 【コラム 向洋の丘】 副院長 真弓武仁 … 2
- 【特集】 市民公開講座を開催しました … 3
- 【クローズアップ】 広報紙をリニューアルします
麻酔科に新任医師が着任しました … 4



○発行○ 2013(平成25)年3月12日 / 下関市立市民病院広報年報委員会

連携医の声

おくぞの耳鼻科クリニック
院長 奥園美子 先生



私は、生野町で耳鼻科診療所を開業していますが、市民病院の先生方、職員の皆様方には、日頃より大層お世話になっております。開業前は旧国立下関病院勤務で、耳鼻科の先生方以外の市民病院の皆様とはあまり馴染みがなく、開業当初の紹介先は国立下関病院に偏っていました。しかし近年、市民病院の先生方をお願いする機会が急速に増えています。

耳鼻科開業医の外来では、溢れるほどの軽症例の中に、時に驚く様な重症例が紛れ込んでいます。緊急性はないが見逃しは許されない重症例(悪性腫瘍等)もあれば、緊急性があり、対応を誤ると致死的となる重症例もあり、後者の代表例が急性喉頭蓋炎です。この疾患は、喉頭蓋腫脹が急速に進行し、一見元気そうな患者さんが、突然気道閉塞を起こします。私も、感冒様症状で来院し、重症感の全くない患者さんの中咽頭に“熟れた真っ赤なトマト”(極度に発赤・腫脹した喉頭蓋)を発見し、足が震えたことがあります。この様に、明らかな緊急例はともかく、むしろ私どもが紹介すべきか否か悩むのは、その一歩手前の症例です。明らかに異常所見があるが現時点では重篤ではない、しかし急変が心配。こういう悩ましい症例が、結構多数、しかも診療時間終了間際や土曜日、当番日に受診されます。この様な症例は、結果的には杞憂に終ることも多く、申し訳なく思いながら紹介のお電話をします。その際、快く紹介を受けていただくと心強く、本当に有難いのです。

市民病院の皆様方の医療レベルの高さは以前より周知の事ですが、紹介時のご対応については、数年前まで、若干疑問に感じるところがままありました。しかし、最近では、職員の皆様の電話対応にも、紹介を快く受けようという心意気を感じられ、安心感があります。お忙しい皆様が、その様に意識改革をされるには、相当のご努力を要したと思われ、頭が下がります。どうぞ今後とも、よろしく願い申し上げます。



「まごころ」を見失わないように

春の陽射しを感じる今日この頃ですが、連携医の先生方におかれましては、いかがお過ごしでしょうか。日頃より、大変、御世話になり、感謝申し上げます。お陰様で、当院は、半年くらい前から、満床の状態が続き、病床のやりくりで苦勞しています。これは、法人化の影響というよりは、救急科が新設され、「断らない救急」を目指して、スタッフが頑張っているためではないかと個人的には考えています。一方、患者様を受け入れる側の整形外科や麻酔科などは、多忙を極め、ストレスも限界に達しつつあります。このような状況を緩和するため、ドクターズクランクに、医療事務的な書類の作成を増やして頂いたり、応援の医師の派遣を要請したりして、できるだけ、医師本来の診療に専念できるようにしたいと願っていますが、医師不足の問題もあり、解決には相当な努力が必要となっています。

話は、変わりますが、最近、『小説の中の医師たち—理想像の解体と「あるべき姿の欠損」』という夏川草介氏(小説家、医師)の評論を読み、共感を覚えました。小説の中の医師像は、『赤ひげ診療譚』などの聖職者から、『白い巨塔』に代表される聖職者としての医師像の解体を経て、その延長上の救急医療の問題点を浮き彫りにしたものや、天才医師を扱ったストーリーなどへ変化しているが、「混沌とした医療現場において、医師はどうあるべきか」という問いに対して現代の小説は終始沈黙しているように思われるとの感想が述べられています。あるべき医師像として、彼は、アルベール・カミュの『ペスト』に登場する平凡な内科医リウーの『誠実』を紹介しています。ペストと戦い続け、町中を奔走するリウーは、医師の献身の精神を基本的に信頼していないが、いかなる理由で献身を続けるのかとの問いに、リウーは「ペストと戦う唯一の方法は、誠実さということなのです」と答えているとのこと。誌面の都合で、この『誠実さ』について詳しく述べることはできませんが、『誠実さ』や『まごころ』を見失わないようにしたいと自戒しているところです。



患者様のご紹介・検査予約・お問い合わせは
地域医療連携室へ ☎ 083-224-3860 Fax 083-224-3861

平成 24 年度第 2 回がん医療市民公開講座

「地域を結ぶ緩和ケア～いのちへの向き合い～」を開催しました。

下関市立市民病院 緩和ケアチーム 篠原 正博（外科部長）

広報年報委員会 吉田 順一（呼吸器外科部長）



▲末永先生のお話真剣に聞き入る参加者の皆さん

「地域がん診療連携拠点病院」として当院が開催しております市民向け公開講座を今年 2 月 2 日（土曜日）、総合病院山口赤十字病院副院長の副院長末永和之先生をお招きし、海峡メッセ下関で開催しました。

おかげさまで 120 名もの多数の市民の方に参加いただきました。ありがとうございました。

講師である末永先生は、ご所属される病院でたくさんのがん患者さんの治療に当たってこられ、ある患者さんとの出会いをきっかけに、安心してがん治療の受けられる医療環境の必要性を痛感され、緩和医療の充

実、緩和ケア病棟の設立、さらには自宅で療養される患者さんへの在宅訪問医療を実践されてきました。ご講演では多くの経験談を通して、「人としての尊厳」、正に「いのちへ向き合い」方、介護を通してますます深まる家族愛や看取りを通しての「いのちのつながり」などのお話しを頂きました。思わず目頭が熱くなり、会場ではたくさんの方が感動の涙を流しておられました。

後半では、市民の皆様からの質問に、一問ずつ丁寧にお答えいただきました。いのちに向き合う先生のあたたかいお人柄が感じられました。下関地域でも、闘病中の多くの患者さんが困っておられる実情がわかり、「地域がん診療連携拠点病院」として当院の責務、緩和医療体制の充実に向けての今後の活動など、多くを学ぶことができた大変充実した時間でした。

▶講座の後半は、末永先生（左）と当院篠原外科部長（右）による質問コーナーでは、患者さまやそのご家族からの切実な悩みに応えていきました。



CLOSE UP!

病院広報紙を リニューアルします!

病院広報紙「ブリッジ」は平成 25 年度から、広報紙「まごころ」としてリニューアルします。

これまでの広報紙「ブリッジ」（地域の先生向け）と広報紙「ふくふく通信」（患者さま向け）を一緒にして、年 4 回、春・夏・秋・冬号として発行します。

●タイトル「まごころ」について

昨年 11 月から 12 月まで、新広報紙のタイトルを、連携医の先生方や当院職員から募集しました。応募総数 14 点の中から、下口広美看護部師長（6 階東病棟）の作品が選ばれました。



NEWS

麻酔科に着任しました!



平成 25 年 3 月から市民病院で働くことになりました。
よろしくお願いいたします。

あかだ てつや
■赤田 哲也（麻酔科医師）／徳島大学卒業（平成 19 年）

新しい環境に早く慣れて、患者さまのために頑張りたいと思います。
どうぞよろしくお願いいたします。

編集後記

地域の先生方には、昨春の法人化後もご厚情賜り感謝です。長くご愛読いただいた広報紙「ブリッジ」は、今回が最終号となり、今春からは患者さま向け広報紙と統合した「まごころ」をお届けします。そのタイトルでコラム「向洋の丘から」があり、ご一読くださると幸いです。

有り難くも本号表紙には、おくぞの耳鼻科クリニック院長の奥園美子先生に玉稿賜り、当方も頭が下がります。と申しますのも、小職が市内の他病院に奉職していた時にご指導いただいた経験によります。別ページでは、地域がん診療連携拠点病院として行っている市民公開講座で、緩和ケアについて開催のご報告をしています。さらに、3 月から着任した新進気鋭の麻酔科医の紹介もあり、胸部外科の症例があることも就職の動機とも伺い、皆様方に加えてご報告します。

医療の地域連携は 365 日動いており、昨春に拡充された救急科も活躍しています。どうか広報紙が改まりましても、引き続きご愛顧ご指導お願いします。

広報年報委員会委員長 吉田 順一



地方独立行政法人

下関市立市民病院

SHIMONOSEKI CITY HOSPITAL

TEL : 083-231-4111 FAX : 083-224-3838

E-mail : info@shimonosekicity-hosp.jp

ホームページ : http://shimonosekicity-hosp.jp/